

■ 肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

自立活動におけるわいわい文庫の活用

愛知県立港特別支援学校
川島広紀

はじめに

本校は、肢体不自由児を対象とした特別支援学校です。本校では、生活単元学習や自立活動の時間に、「わいわい文庫」の活用を行ってきました。

本研究では、絵本の好きな子どもを対象にして、自立活動の時間に、姿勢を保持する活動の中で、iPadのアプリケーションソフト「ボイス・オブ・デイズ」で読書を進めました。

生徒の実態

対象生徒は、高等部普通科教育課程C（自立活動を主とする教育課程）で学習しており、主障害は脳性まひです。胃ろうからの栄養注入を行っています。手や腕を動かしてスイッチなどを押すことができますが、手指を使った細かい操作は困難です。首はすわっていますが、頭部が右に傾いたり、不随意に右を向いたりすることが多いため、フレキシブルクッションを使って、頭部の安定を図っています。教師が後方から支援してあぐら座位をとったり、プロンボード（身体の全面を支える立位

保持具）を使って立位をとったりすることができます。



活動の様子



器具の配置

本生徒は、絵本の読み聞かせを好み、『ぐりとぐら』や『キャベツくん』シリーズや『へんしんトンネル』などの気に入った絵本がいくつもあります。教師とやりとりをしながら、二者または三者択一で読んでほしい絵本を選ぶことができます。教師が本人の気に入った絵本を読むと、「うー」と声を出して笑顔になる姿が見られますが、本人が知らない絵本を読むと、笑顔は見られないことから、絵本の内容をよく覚えていることがわかります。

授業での活用

自立活動の時間であぐら座位をとる活動の中で、「わいわい文庫」の活用を行いました。あぐらを保持しているときに、絵本を見ることで本人の視線が正面に定まり、自ら頭部を保持しようとするのをねらいました。

あぐら座位をとる本人の前に机を置き、書見台を使って机の上にiPadを設置し、授業を行いました。本人があぐらを保持することができるように、教師は後方から支援を行いました。本人が正面を向いた姿勢を自ら保持できるように、おもに頭部の支援を行いました。

活用の結果

あぐら座位をとっている間、本人はiPadの画面に注目していましたが、は

じめのうちは、本人の気に入った絵本であっても、笑顔が見られず声も出ませんでした。しかし3、4回と授業を繰り返し行くと、ページの大きさや読み上げの音声における、絵本との違いに慣れてきたようで、「うー」という声が出たり、笑顔が見られたりするようになりました。頭部は、右に傾くことができました。しかし、教師が頭部の向きを支援することで、自分の力で顔を正面に向けて、画面に注目し続けようとすることができました。

マルチメディアDAISY図書は、絵本を保持したりめくったりする動作が必要いため、教師が姿勢保持の支援に集中することができ、本人が正しい姿勢であぐら座位をとり続けられることにつながりました。また、教師と子どもが同じ目線で絵本を見ながら、活動に取り組むことができました。

おわりに

今回の研究では、絵本の好きな生徒を対象に、自立活動の時間に「わいわい文庫」を活用しました。姿勢を保持する活動では、子どもと教師が一緒になって楽しみながら、本人が自ら姿勢を保持しようとする姿や、たくさんの笑顔が見られました。マルチメディアDAISYの読み上げや自動ページ送りの機能を活用することで、教師は姿勢を保持する支援に集中し、子どもは楽し

んで取り組むことができました。

その一方で、読み上げの音声や画面の大きさなどの絵本との違いに、子どもが慣れるまでに少し時間がかかりました。読み上げの音声は、人が読み上げる場合と抑揚などの表現が異なっているため、抑揚などの表現を、柔軟に調整できるとよいと感じました。

また、本の表紙を見ながら絵本を選択できるような機能や、タブレット端末の画面をスワイプすることでページ

送りができる機能があると、さまざまな実態の子どもたちがより主体的に「わいわい文庫」を活用することができると感じました。

「わいわい文庫」は多くの障害のある子どもたちが、絵本に親しむことができるものだと思います。今後も、多様な実態の障害のある子どもたちが、主体的に活動できるようになっていくとよいと思います。

